

「医療崩壊」の不都合な真実

医療ジャーナリスト 森田 洋之

- *病床が減るほど平均寿命が伸びる
- *医療の現場に直面して受けた挫折感
- *病院の無くなった夕張では死亡率が低下
- *医療分野でなぜ「市場の失敗」が起こるのか
- *社会的共通資本という考え方
- *大阪で病床逼迫でも隣県ではガラガラ
- *医療ニーズの変化に対応できない日本
- *コロナ死者数が少ないことを直視すべし
- *医療の目的は何かを考え直す時
- *今、世界標準はプライマリケア



柴生田 それでは開会いたします。（拍手）

本日は医療ジャーナリストの森田さんにおいでいただきました。森田さんは1971年の出生まれで、一橋大学をご卒業後、医学をもう一度学びたいということで宮崎医科大学に入られ、そこで医者免許を取られ、その後、皆さんよくご存じの夕張で医療崩壊の現場を経験されたというご経歴でございます。今も鹿児島で治療に当たっておられますが、一方でわれわれが普段耳にすることがない日本の医療の現実についていろいろお書きになっておられます。この1年、私どもたいへんな思いをしているわけですが、日本の医療制度はたいへんな欠陥を抱えている、感染症の専門家や医者の言っていることが疑わしいというのは日常感じていることでご

ざいます。今日はそこら辺のところを非常に明快に切っていただけではないかと考えております。

それでは森田さん、よろしくお願いいたします。（拍手）

病床が減るほど平均寿命が伸びる

森田 森田です。よろしくお願います。

今日私は鹿児島から来ましたけれども、コロナの前までは東京、大阪に講演でよく呼ばれていましたが、東京で講演するのは1年以上ぶりだと思えます。コロナで講演活動もほとんどできなくなってオンラインが増えました。

経済倶楽部の皆さんはどんな方々がいらっしゃるのかよくわからないのが正直なところです。